

Close Up
Artist

アシユレー・コリンズ

Power of Love——私が絵を描き続ける理由



ロサンジェルススタジオでの制作風景

今 や世界中の博物館、大使館や個人コレクターたちを魅了するアシユレー・コリンズ（1967年生まれ）。長いホームレス生活と貧困を経て、1989年に降口サンジェルスでプロの画家となりキャリアを追求してきた。絵画に取り入れられているコラーージュの数々——、歴史的文書、鉄鋼、金属、その他多様なメディア。その中に比喩的に描かれる馬をモチーフに、現代的で深層心理に根ざした精神性の高い作品を発表。フォートワースにある国立カウガル博物館は毎年4、5人を選んで「Hall of Fame」（殿堂入り）として表彰しているが、今年は700名の候補から選ばれて、アシユレーもその一人となった。

版画工房アーティーの加藤泉氏がアメリカでシルクスクリーン工房を経営していた頃からの知己であるアシユレーを日本に招待、今回も魂の触れ合いともいうべき、共同制作による版画作品を手がけた。制作のために来日中だった版画工房アーティーを訪ね、話を伺った。

—— 絵の中に馬が描いてある作品が非常に多いですね。

アシユレー 3歳の頃、母親から大きなロール紙をもらって、そこに絵を描き始めました。誰でも困難な時、その人にとって大切なものがある。それは人によって違う形で現れます。木だったり鳥だったり。私の場合はそのシンボルとなるのが馬でした。

ダグラス（アシユレーの夫） アシユレーが描いているのは、彼女が12歳の時に大切にしていた馬の魂。彼女は非常に貧しい家に生まれたので、芸術や世界の美しさは家族には理解する余裕がなかった。食べることに腹を満たすこと、お金を稼ぐことしか知らなかった。だからアシユレーのような木を見ていてその木が生きているとか、鳥に話しかけるとか、そういう感性をもった子を理解することができなかった。例えば彼女は幼い頃、紙を羽のように切り取って自分の身体にくっつけて、くちばしも作っ

て、木の上に座っていた。しかし家族はそういう光景を見ると、彼女が狂っているんじゃないかと精神科医に連れていきました。

—— アシユレーさんがアーティストになったきっかけは？

ダグラス 彼女は画家になるほかに選択肢がなかった。18歳のころに家族に宣言して家を出た。

—— 家族は反対しましたか？

ダグラス もちろん。家族は絶対に失敗するぞと。絶対に貧乏になるしでたらない人生になるよと。

アシユレー 家族は正しかった。実際にその後お金もなくなり、友達も失い、10年ほどそういう状態が続いた。ホームレスで、捨てられたボートに乗っていたりとか、知らない人の家のソファに寝たりとか。レストランでウェイтрレスのアルバイトもして、稼いだお金は全部絵を描くために費やしました。



アーティストの工房で制作中のアシュレー。インタビュー中の笑顔から一転、真剣なまなざしに。

で彼女は「アシユレー・コリンズというのはイギリスの男性だ」と伝えなんです。

——それは何歳のころ？

ダグラス 26か27歳くらいのころ。

アシユレー ギャラリーをやっていてわかったのは、ギャラリストであることとアーティストであることの違い。アーティストはギャラリーに自分の作品を展示してください、とやってくる。だからギャラリーというのはとても大きな力をもっていることがわかった。

ダグラス 彼女は自分の作品をあたかもイギリス人の男性、つまりまったくの別人が描いたかのように展示しました。そうしたらそれが売れ始めたのです。

アシユレー ロサンゼルスでアート・エキスポにギャラリーを出展したとき、他のアーティストと一緒に自分の作品も1点出した。ギャラリーを運営していた期間は、昼間はギャラリーを開けて、夜はアルバイトをして、夜中に自分の創作をしていました。

——寝る時間がないですね。

アシユレー 2時間しか寝ていなかった。2年間はそれを続けました。集中していたし、若かったから出来たのです。今はそんなことできない(笑)。そのエキスポに来たある女性が「これはいくら？これは本当はあなたの絵でしょう」と言ってきた。それが一番最初に売れた作品でした。その女性が買ってくれたんです。私はその時に売れたお金の半分をチャリティに寄付しました。それ以降はもっと売れるようになったし、

ったし、自分が自信をもつきっかけになった。今は経済的に恵まれています。昔を忘れてはいけないから今でもチャリティをしています。

ダグラス アートの世界で起きている90%くらいのことは、流れ星のようにすぐ消えてしまう。2年や3年くらい大きな美術館での個展があっても、その後はもう消息がないとか。なぜかというアートの世界はある意味狂っていて、美術館など企画する側は常に瞬間の驚きを欲しがるから長続きしない。アシュレーが辿ってきた道というのは正門ではなく、後ろのドアを入って来たようなもの。王道を歩いてきたわけではない。ミュージアムにも収蔵されているけれど、それよりも個人の所蔵が多い。たとえばアーカンソー州にある、ブリッジズ・ミュージアム。アメリカですごく大きなミュージアムです。このミュージアムの創設者はウォルマートの経営者の一族で、アシュレーの作品をたくさん持っているけれど、ミュージアムでなく、自分のプライベート・コレクションとして持っています。

——今回殿堂入りされた「Hall of Fame」とは？

ダグラス 「Hall of Fame」というのはかなり長い歴史があるもの。アメリカの西部の女性、カウガールや西部を変えた女性たちを顕彰する賞で、かなり前に始まったもの。ジョージア・オキーフも、アメリカで初めての女性の最高裁判所の裁判官も殿堂入りしています。アートの限らず、医療など、あらゆる分野の女性を対象に

しています。

——ステータスですね、位を与えるみたいな。特定の作品に対して与えられるものですか？

ダグラス いえ、それまでに達成したことに対して与えられる賞です。11月21日に授賞式があります。

——チャリティは今どんなところに？

アシユレー アフリカやカンボジアに学校を作ったり、病院のガンの研究支援をしたり。他にも色々な国でやっています。

ダグラス アシュレーは毎回自分の作品が売れるたび、その売り上げの大部分をチャリティに当てています。僕に出会う前には自分の描いた絵をチャリティとして贈っていたんだけど、僕がそれはノーと言って(笑)。売り上げのお金をあげたほうがいいと。

アシユレー ただ自分たちのお金为孩子も達のためにちゃんと使われているか監視する必要があります。そうしないと政府が別の分野に使っている場合もありますから。

——アーティストの加藤さんとの出会いを教えてください。またその後、なぜ今回日本にいらして、日本で作品を作ろうと思ったのですか。

アシユレー 日本に来た理由というのは、加藤さんと仕事があったから。第一に、彼の人柄に惹かれました。彼と一緒に仕事をしてくれるというのは自分にとって名誉なことです。アメリカで一緒に版画を制作したことで加藤さんの中に私と同じ純粹さを感じました。加藤さんも私の中



「RENEGADE」2017年 限定75部 技法名：アーカイバル®。(特記：和紙、レズン) 今回の来日中に制作された、アシュレーとアーティストのコラボレーション作品の一つ。原画画像(画面左側)に加え、関連するオブジェを右側に配置し、全体として版画作品に独自の意味を持たせた。

に、何かと見出しにくれて、彼が日本に帰国後に、日本に招待してくれた。奥さんのマチコとともに、加藤さんは自分の家族の中に迎え入れてくれた。

ダグラス そのとき彼女の作品はともて売れていたんだけど、ある種スランプに陥りがちだった。そんな時加藤さん夫妻が日本に呼んでくださり、とても親切にしてくれて、疲れ果てていた彼女を回復させてくれた。そういうひとつの親切的行動が人生を変えるのだと思います。

アシユレー 2つ目の理由は、30年以上絵を描いていますが、加藤さんと私で作った版画の質と同じものは、世界中どこに行っても見つけることはできないと思う。博物館や美術館の展覧会でも、その質、芸術的な才能に匹敵するものはない。私が自分のすべてを自分の作品に投入するように、

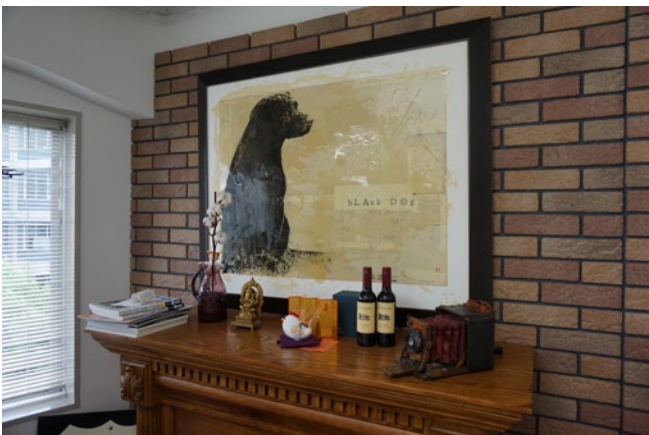
加藤さんも自分のすべてを版画に捧げている。世界中の美術館に行つて色々な版画を見ているけれど、加藤さんはどの版画を作っている人とも違う。私にとって彼はアーティストなのです。

ダグラス 現在のアートマーケットでは、版画制作者というのはあまり重要視されていません。中国にデジタルデータを送ったら、5時間経てば1万枚を刷って仕上げてくる。でも版画制作というのはそういうただのコピーとは違う。

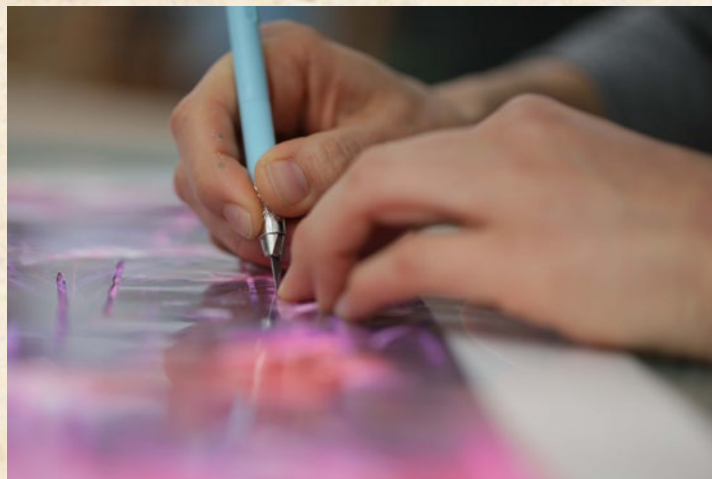
加藤 もう少し話をシンプルにしましょう(笑)。1987年にロスに行つて、Kato Art Silk Screen Studioをオープンしました。東京に戻ってきたのが2001年。アメリカでアシュレーと初めて一緒に仕事をした作品はものすごく凝っていて大変でした(笑)。アシュレーのペイントのひとつの特



アーティストでの制作風景。左にアーティスト代表の加藤氏。



アシュレーとアーティストによる最初のコラボレーション作品。



アーティーが誇る「5つのこだわり」

- 1. 作家の創造性を広げる** 最初の打ち合わせで様々なサンプルを提示し、原画やデータから広がる可能性を作家に実感してもらう。色校正では共に新しい創造性に挑戦し、単に色や数値を確認するのではなく、作家と世界観を共有して表現することを目指す。
- 2. アーティーオリジナルブランド「アーカイバル®」で世界に誇れる品質を** 用紙やキャンバス、ペイントなどの材料は世界から良いものだけを厳選。定期的に作品をコンペに出し、世界基準の品質を提供する。その誇りの証として独自ブランドを展開している。
- 3. 長期的な視点をもとに** 用紙やキャンバス等は長期的な変色を極力避けるため、コットン100%にこだわる。また、印刷前に紙の表面をクリーンアップして埃を除去し、将来的な色剥げを防ぎ、時間をかけた検品も行う。また、作家や画商との長期的な関係に重きを置き、制作後にも定期的な連絡を続ける。
- 4. 画期的な大型立体スキャナーを導入** 高解像度の大型立体スキャナーにより、立体感や繊細な素材感まで記録し、原画の魅力を最大限に引き出す。
- 5. 豊富な特殊材料・特殊効果** 紙やキャンバス以外にも、漆や金属板、様々なボードなどにも豊富な実績で対応。また、刷った上に金箔や螺鈿、金泥、ラメ加工などの特殊効果も多く手がける。



版画工房アーティー

TEL: 〒106-0032 東京都港区六本木7-21-22
セイコー六本木ビル4F
(国立新美術館 正門より徒歩1分)
TEL: 03-6721-1850 ※営業時間: 9時~17時30分(平日)
FAX: 03-6721-1860
E-mail: info@artie.co.jp
ホームページ: <https://artie.co.jp/>

ことで、互いの想像力の一歩先の表現を目指す。時には手彩色やエアブラシによる加工、モデリングペーストや金箔などを施す特殊加工によって、一般的な「版画」の概念を超える斬新な表現にも果敢に挑戦している。

こうした創作を支えるアーティーの高い技術力は、多数の受賞歴からもうかがえる。ロス時代には特殊印刷業者の国際組織「SGIA」における「シルクスクリーン美術印刷部門」の部門賞を3年連続で受賞。2008年と09年には「デジタル印刷部門」の最高賞にあたる「Best in Show」を受賞し、09年には審査員特別賞も同時受賞する快挙を果たした。世界トップレベルの高い品質と、新たな版画表現のために妥協しない姿勢こそが、多くのアーティストに評価される所以だろう。

(編集部)

微ですが、古い本のページを野外に何年も出しておいて日焼けさせて、それを何枚も画面いっぱいにつけています。それらをきちんと見せるためにテキストはタイプして、日焼けの色は特色で、何層もレイヤーを作って1版1版やっていったんです。

—— 気が遠くなりますね。

加藤 そのクオリティと、一緒に働いている間のアシユレーとのやりとりが、なにか彼女の琴線に触れたらしくて。あとは彼女とのタイミングですね。2001年に日本に帰ってきてから、アメリカで作ったアシユレーの版画作品の絵柄を日本で設立した新会社のキャラクターとして使う権利を買ったんですけど、その時に彼女はかなり売れ始めていて、いろいろな画商が騙して契約していたりしてめちゃくちゃな状態だった。もう全部捨てていいから日本にいらつしやい、と呼んで。

—— アシユレーさんがいらしたのは？

加藤 たぶん2002年くらい。日本に呼んだタイミングがよかったのかもしれない。日本人の従業員の接し方にも彼女はびっくりしたようです。ファミリーになつちやう感じ。

心をもっているから、長年経ったあともスタッフが残っていられる。原画に対してただ複製プリントを作っているのではなくて、彼は新たにひとつの作品を作っている。

加藤 それと、アシユレーは確実に、他の人には見えないものが見えているんですね。草間彌生さんなんかもそうだと思いますが。そこをまず理解しないと彼女のことはわからない。人に会っていても、その人が何を着ているのかは一切関知しない。どんなエネルギーが出ているのかとか。絵の中にもあるんですが、犬のまわりにぼうつとした影が描かれていて、これは何？と聞いたら、人や犬を見るとその後ろに見えるんだ、と。エネルギーが。

アシユレーは子どもの頃に誰もが持っていたけれど、大人になるにつれて失っていくものが一切なくならない。むしろ成長させているという、非常に稀有な女性なんです。今日の話を聞くと「本当？」と思うかもしれませんが、彼女と一緒にいるとよくわかります。

日本の美術館ではゴッホやシャガールなんかあまりにも神格化されていて、彼らの本当のところはあまりフォーカスされていないと思うんです。彼女は絵の中に「LOVE」を凝縮させ、チャリティーに力を注ぎ、瞬く間に全米トップアーティストになった。そういうのが認められHall of Fameにも選ばれたんでしょうね。

—— 今日是有難うございました。今回のアーティーさんで制作された新作も楽しみにしています。(版画工房アーティーにて)

ロサンジェルス時代に設立したシルクスクリーン工房の前で。前列中央にアーティー代表の加藤泉氏。



美術専門の版画印刷を扱う「版画工房アーティー」。代表を務める加藤泉氏は、江戸時代に屋号「美濃文」として活躍した時絵職人の家系で、時代とともに家業は時絵から版画制作へと移行していった。1987年に米ロサンジェルスでシルクスクリーン工房を設立、12年間アメリカカンパートの制作に携わる。2001年に帰国後、東京に「版画工房アーティー」を設立。現在は六本木・国立新美術館のほど近くに工房を構え、版画や写真、美術作品等の制作、高精細の絵画用スキャニングのほか、アーティー独自のジグレイ版画「アーカイバル®」を商標登録し展開するなど、多彩な活動を続けている。国内作家では島村信之、池永康晟、篠田教夫、天野喜孝らの作品を取り扱うなど、第一線で活躍する実力作家からの信頼も篤い。

アーティーの大きな特色として、「原画を元に、新しい創造物を作る」CREATION FROM ORIGINALというコンセプトを掲げている点が挙げられる。単にオリジナル作品の複製を作るのではなく、版画を原画と同等に扱い、作家と工房が相互に意見交換する

プロのアーティストが信頼を寄せる 版画工房アーティー